

道東地域の身近な自然を守る活動

池田 啓介

いけだ・けいすけ
1932年名寄市生まれ。帯広市教員退職。現在、帯広市野草園運営委員・帯広市長と川実行委員会事務局長・北海道自然観察指導員・北海道自然保護協会理事。

本文のねらい

北海道横断自動車道は、広域高速ネットワーク計画路線網の主要幹線として、道東地域でも事業が進められている。これに関する環境影響評価は果たしてどのような内容であるか、大きな関心を持つところである。また、都市開発やその他の道路工事が、道東地域の湿原や動植物にどのような影響を与えるか、問題となる。これらについて、十勝を中心に道東地域の事例を挙げ、問題点を明らかにしたい。

一、はじめに

大雪山国立公園の土幌高原道路計画めぐり、二十八年の長きにわたって論議が続けられてきた。この問題では、「貴重な自然を壊さない・身近な自然を守ろう」という合い言葉によって、十勝、そして北海道はもとより全国まで運動の輪が拡がり、計画中止に至っている。このことは、歴史の一頁として記録に残されることである。この長い取り組みによって、私達が住む道東地域においても、多くの方が身近な自然環境に目を向けるようになった。以下に、いくつかの事例を挙げてみたい。

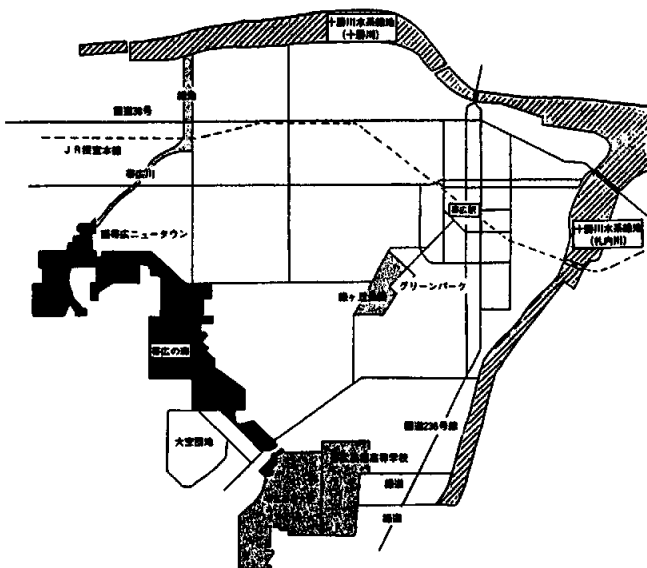
二、帯広市における事例

(一) 帯広市の宅地開発と環境アセス

帯広市の宅地開発は郊外に移行しており、残された森や自然河川を改造してしまう例が増加している。一方、現在、環境影響評価に関する新法（新アセス）に基づいて、

これらの宅地造成計画が進められようとしている。帯広市稲田町・川西地域の八十九ヘクタールに及ぶ団地（宅地）開発計画が説明会に提出された。この予定地には、湧水を源流とし、自然が残された「機関庫の川」があり、この地域をどのように守っていくかが課題となっている。

帯広市稲田町・川西土地区画整理組合設立準備委員会から、身近な自然環境の保全と宅地造成に関する問題が提起され、地主・自然保護団体・帯広市、研究者などの意見を取り入れた検討が開始された。事前に現地を調査し、関係機関の意見を十分に取り入れた計画を進めるといふ、環境アセスの新たな試みが始まっている。

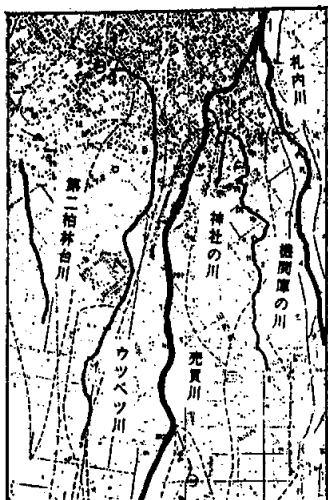


帯広の森と水系緑地

帯広市では十勝川と札内川の河川敷を活かした保全緑地と「帯広の森」を連携させた森づくりが進められてきた。この一貫した方針の下で、上記の団地造成は、現存する孤立林と河川緑地を結びつけ、小動物の生息地や行動圏を考慮した上で、進められようとしている。

(二) 高規格道路計画とニホンザリガニが生息する水源地

今から二十四年前、帯広市郊外を森で囲む「帯広の森」事業が始められ、市民の手で植樹が進められてきた。現在、この多くが森の姿を呈している。また、郊外には湧水を源流とする自然河川（機関庫の川、第二柏林台川など）が少なくないが、これらは、下流域に豊かな河畔林を持ち、ニホンザリガニ、水生昆虫、野鳥や小動物が生息する豊かな自然地域として残存している。



湧き水を源流とした川

ところが、高規格道路「帯広・広尾自動車道」は、これらの森を横切ることになったのである。この問題に関して、地元には「川と河畔林を考えると」が設立され、検討が開始されている。高規格道路は、幅八十二メートル（側道を含む）、高さ

七メートルの土盛りで工事される。したがって、貴重な自然を守るためには、道路の地形・地質・動植物に与える影響について十分な事前調査が必要であり、市民にそれらのデータを公開し、市民の意見を取り入れるという、十分な環境アセスが必要である。

(三) 帯広市野草園の自然と乾燥化

帯広市野草園は、緑ヶ丘公園内の人手が加わっていない部分に設けられ、自然観察の場として小中学生のための理科教育に役立て、自然を愛する心情を養い、市民の散策の地として自然への親しみを深めることを目的に開園されている。

十勝平野に自生をほしのままにしていた野草は、今や年々姿を消している現状にある。その中で、帯広市野草園には十勝の自生植物が豊富に生育し、自然の姿が残されている。

この野草園は、帯広川支流ウツベツ川の両岸を含む、五十四〜六十二メートルの標高にあり、四三、五三〇平方メートルの面積を持っている。この自然は、沖積低地の湿地林が主体となり、周辺の河岸段丘にカシワ林が成立している。土壌タイプは、以下の四種類に区分され、それぞれ土壌湿度・地形・植生と密接に関係することが知られている。

① 褐色火山性土が分布する範囲は、東側正門から動物園に至る道路沿いの、河岸段丘面の乾燥地である。ここの植生は、カシワが優占しエゾヤマザクラ、シラカンバなどが混生する森林であり、林床には優占種エゾミヤコザサのほか、エゾヤマハギ、スズラン、ナワシロイチゴ、ツルウメモドキなどが見られる。

② 湿性厚層黒色火山性土（傾斜相）は、北東と南西の段丘斜面部に分布し、水はけの良くない腐植質火山性土となっている。植生は、カシワ、カラコギカエデ、ヤチダモなどが混成する森林であり、林床にエゾミヤコザサ、ビロードスゲ、ザゼンソウ、エゾクガイソウ、ヤマブキシウマなどが見られる。

③ 湿性厚層黒色火山性土は、地下水位の高い腐植質火山性土であり、沖積低地となる平坦面に分布している。植生は、地形・地下水位のわずかな変化に応じてヤチダモ・ハルニレ・キタコブシが多い林分とミズナラ・トドマツが多い林分が交错している。林床ではエゾミヤコザサも見られるが、ビロードスゲ、フッキソウ、ユキザサ、オニシモツケ、オオウバユリ、エゾトリカブトなど草本類が豊富である。この範囲は、野草園の約七十四パーセントの面積を占めている。

④ 下層無機質低位泥炭土は、年間を通じて湛水状態にある泥炭土壌であり、南側凹地に見られる。ここではハンノキ（ヤチハンノキ）とヤチダモが優勢な森林が成立し、林床にはカブスゲ、オオカワズスゲ、エンコウソウ、ミズバショウ、キタヨシ、クロユリなどが見られる。とくにクロユリは、「アンラコロタウシナイ（黒百合の谷）」と呼ばれていたこの地を指標し、ここが市花に指定されているクロユリの貴重な生育地として保存されている。

ところが、この野草園の環境は、元来郊外にあったのが今や街の中心部に位置するところになり、都市化による色々の影響を受けている。とくに土壌の乾燥化が進み、ササが拡大して本来の植生が変化する問題が生じている。



高木化した園内



植生調査

平成二年より野草園総合調査団（帯広畜産大学・野草園運営委員会）を組織し、乾燥化防止対策を講じるため調査を進めてきた。その結果、乾燥化を防止し、ササの拡大を防ぐためには、地下水位と土壌湿度を高めることが重要との結論に達している。野草園のシーズンオフである十月末には、

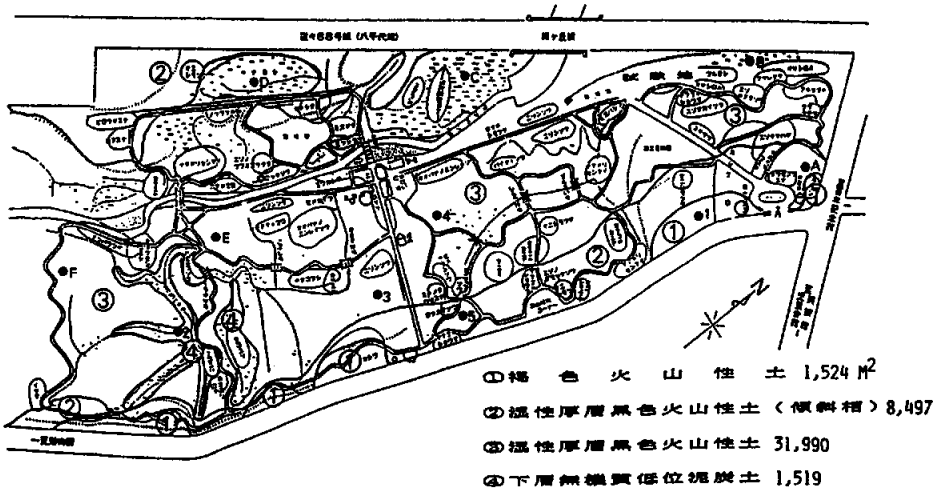


図1 野草園の土壌分布図



ヌック川は清流と緑豊かな河畔林

毎年ササ刈りをしている。
 しかしながら、開園以来四十一年という歴史の中で、十メートル以上の高さに生長し密生した木々によって林床への日照が変化し、変化する森林と林床の野草との関係について、問題は十分解決していない段階にある。

三、十勝地方における事例
 （一）大正町ヌック川の自然を守る運動
 帯広市中心部から南東約十五キロメートルに大正町ヌック川がある。札内川の支流となるヌック川は、雨水が多い時には地下浸透が著しく季節によって流量の増減も著しい特徴があり、「濁きあがる川」として大正町の低地帯を形成している。

この河畔一帯には、ヤチダモやハルニレが主となる冷温帯落葉広葉樹林（河畔林）が自然な状態で残され、貴重な植物も生育している。地元の「ヌップク川をきれいにする会」は、みずからの調査によって動植物の資料を作成したり、住民集会方式による学習会を開催したりして、自然保護活動を始めている。

（二）浦幌野鳥倶楽部による野鳥観察を通じた自然保護運動

浦幌野鳥倶楽部は、浦幌町の生涯学習教養セミナー受講者を中心に結成されたサークルであり、野鳥の生態観察を初めとして地域の自然環境を調べ、その保護活動に大きな成果をあげている。

このサークルは、月一回の探鳥会を行うほか、原生花園の草花を観察したり、浦幌川源流域を探索したり、動物の足跡ウォッチングをしたり、季節に応じて自然を楽しんでいる。

浦幌町には、戦後開拓されるまで湿原であったが、現在、農地に改良されなかつた旧河川跡湖沼群とその周辺の原野が残されている。また海岸砂州の一带は、開拓されずに元来のままに残されている。これらの地域は、天然記念物タンチョウの営巣地、ガン類などの渡り中継地となり、数多くの水鳥が飛来し、また生息している。

この水鳥生息地は、近年の河川改修や農地整備によって消滅の危機にさらされており、上流部における森林の荒廃も問題になっている。浦幌野鳥倶楽部は、以上の問題に対して、自然環境を破壊しないよう関係機関に申し入れるなど、積極的な活動を続けている。

（三）セキレイ会による環境問題の取り組み
セキレイ会は、十勝・太平洋湖沼群の自然を考えようという目的をかかげ、主に忠類・大樹の町民によって発足された会である。

地域の環境問題に熱心に取り組んでいるセキレイ会は、身近な自然環境問題を事前に対処できるよう、観察会を通して野草の開花状態など自然調査を行ったり、開発計画に対して関係機関に申し入れたり、身近な自然を守ろうと努力を重ねている。とくにタンチョウ生息地にオートキャンプ場を造る行政の提案に対して、セキレイ会による計画変更の申し入れは、大きな成果をあげたところである。

四、釧路・根室地方における事例

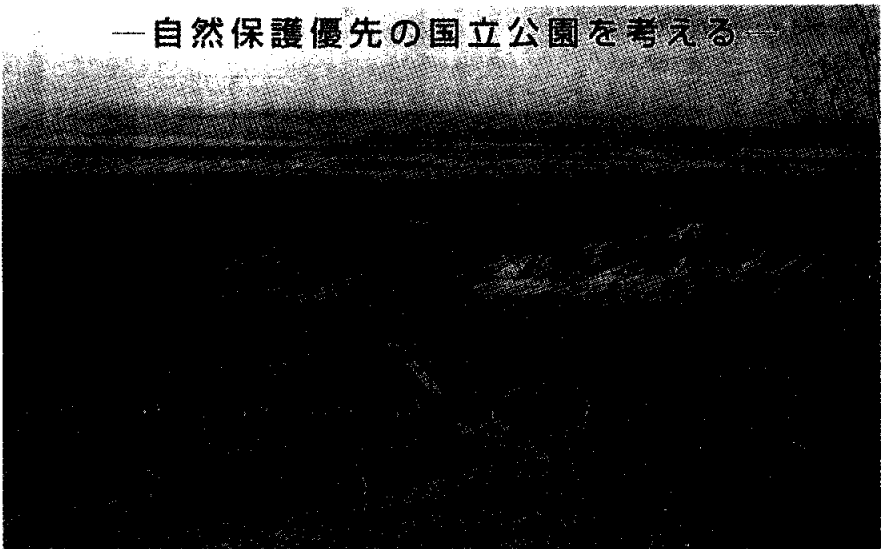
（一）釧路湿原の自然と「トラストサルン釧路」の活動

釧路湿原は、一九八七年に国立公園に指定され、自然保護優先の管理運営がなされている。

しかしながら、国立公園地域は、湿原総面積約二万三千ヘクタールのうち約一万六千ヘクタールだけであり、国立公園普通地域を含む約千ヘクタールの湿原が農地開発などによって失われ、タンチョウ営巣地は国営農地開発によって分断されている。湿原生態系は、南部地域を横断する広域農道の工事、湿原の洪水防止機能を半減させる釧路川遊水池の堤防工事、林道の工事などにより、大きな影響を被っている。

また、周辺地域の開発による湿原への影響が問題となっている。次の二つは、周辺から湿原生態系に大きな影響を与える点で大きな問題である。

一 自然保護優先の国立公園を考える



釧路湿原を囲む荒廃した丘陵地

①湿原を取り巻く森林域では、保水力に富む落葉広葉樹林が伐採され、その一部はカラマツ人工林に替えられている。②湿原に流れ込む河川の上流域では、河川改修工事が続けられている。増水時に工事地域から大量の土砂が排出され、湿原に堆積するという大きな影響が明らかである。これら

のことは、湿原生態系への破壊につながる大問題となる。

したがって、湿原の保護は、国立公園内部だけの問題ではない。湿原に水が集まる地域一帯(集水域、流域生態系の全体)の保全が考えられなければ、湿原の保護にはならないと言える。

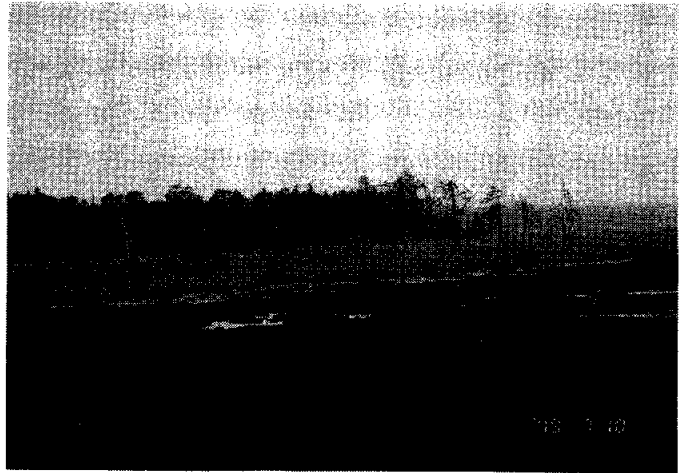
これらの問題に対して、「トラストサルン釧路」は、熱心な自然保護活動を続けている。周辺の丘陵地帯では、伐採された荒廃地に自然林を再生するよう、釧路湿原の周囲から湧き水がたんたんと流れ出すよう、湿原保護基金や多くの市民の協力を得た植林活動が行われている。

地元の標茶町は、国立公園に面した民有地約百十五ヘクタールを開発行為から自然を守る目的で購入し、町の水源涵養保安林に指定した。また、釧路湿原を特徴づけるキタサンショウウオの生息地は、釧路外環状道路の計画路線に近接している。現地における事前調査と貴重生物への影響を避ける路線変更を含む検討が必要である。これらに関しても、「トラストサルン釧路」は、関係機関に働きかけており、釧路湿原の自然保護を進める運動の核として活動を続けている。現在、「トラストサルン釧路」は、NPO法人化について検討を始めているが、今後の釧路湿原の保全にとって大きな力を発揮していくに違いない。

(二) 根室の高規格道路計画に関する環境アセス
平成十年十月、根室市総合文化会館において開発局による「一般国道四十四号線・根室道路に関する環境影響評価準備書」に関する市民に対する説明会が開かれた。

この道路では、とくに高規格道路の根室市穂香

から温根沼に至る全長七キロメートルの区間に、天然記念物のタンチョウ、シマフクロウ、オオワシおよびオジロワシの生息地であり、さらに貴重な動植物が確認されている。



根室湿原を望む

このように貴重で豊かな自然が認められるところに高規格道路を建設しようとしているのである。事前の環境アセスは市民とともに調査されること、そして市民の声や要求を十分に取り入れた計画路線にする必要がある。

五、最後に

以上、道東地域における自然の保護活動につい

て述べてきた。一つは、北海道横断道路の建設工事がその周辺の貴重な自然や貴重な動植物生息地に影響を与える場所が多いことが大きな問題である。二つ目には、地域ごとに残された自然(湧き水や湿原)が地域の宅地開発や道路建設によって破壊される、あるいは大きな影響を被ってしまう、各地に共通した問題がある。

道東地域において、土幌高原道路問題はまだ継続している。未開削区間の工事は中止されたが、今後の保全策がどのように講じられるのか、私たちは徹しく見守っていかねばならない。しかし、このことについては会報や会誌に取り上げられてきたので、ここでは割愛している。

道東地域の自然を守り続けていくことは、私たちの果たすべき役割なのである。

